祭とソーシャルキャピタル、防災意識の関係に関する一考察

京都大学大学院工学研究科　学生会員　○池尾仁
京都大学大学院工学研究科　ロシャン＝バンダリ
京都大学防災研究所　正会員　横松宗太
京都大学防災研究所　正会員　岡田憲夫

１．はじめに

近年、地域の状態や能力を表す概念としてソーシャルキャピタル（以下 SC）が注目されている。これまでに、SC が防犯、健康、失業などの社会問題の解消に有用であることが実証されている。そこで本研究では、だんじり祭で有名な大阪府岸和田市を対象に、毎年行われるだんじり祭のような、地域を巻き込んで非日常を体験させる大規模なイベントが住民の SC、さらには防災の自助・共助意識や災害対応意識にどのように影響を与えているのかをアンケート調査を元に明らかにすることを目的とする。

本研究では SC を、信頼と互酬性によって結ばれた人々の繋がりと定義する。人々の繋がりにも様々な種類が存在するため、信頼や助け合いの意思などの心理的な繋がりに着目したものを「認知的ソーシャルキャピタル」、家族やスポーツの交流試合等の社会的ネットワークに着目したものを「構造的ソーシャルキャピタル」に分類する。なお、祭と地域住民の繋がりに関心をもつ先行研究として、Knottnerus(2006)は祭礼時において参加者達の意欲や情熱が高ければ高いほど、（祭に参加している）グループへの貢献意欲や結束が強化され、祭が住民の関心を引き寄せることによって地域に対するより深い理解へと発展していくことを指摘している。本研究では岸和田市を対象にアンケート調査や共分散構造分析を行い、祭によって育まれた地域の SC が防災意識に及ぼす影響を定量的に評価する。

２．アンケート調査の概要と集計結果

アンケート調査は平成 21 年 12 月 10 日に岸和田市内の小・中学校に通う生徒の保護者を対象に実施した。配布数は 1500 部で、平成 22 年 1 月 7 日までに 506 部回収した（回収率 33.7%）。

本研究では、対象地域の住民を「祭によく参加している人」と「祭にあまり参加していない人」に分け、各々の SC や防災意識の高さ、地域認識の度合いやだんじり祭から受ける影響の大きさなどを測定する。単純集計による主な結果を図 1，2 に示す。なお、変数間の比較を容易にするために、どの変数の値も 0 から 1 の範囲に収まるようにスケールを調整し、祭への参加頻度別に平均値を求めて指標化している。

アンケート調査による集計結果から、だんじり祭によく参加している人の方がより高い構造的 SC 及び災害対応意識を有していることが分かる。認知的 SC や地域住民の自助・共助意識の高さに関しても同様の結果が得られた。このことは SC が大きいほど、防災意識が高くなることを示唆している。さらに、だんじり祭によく参加している人の方が、地域内で助け合おうとする意思が強く、お互いを厚く信頼している傾向にあることも分かった。一方、だんじり祭に参加していない人が平常時も含めて地域内で気まずくなったりすることは考えにくいという結果がアンケート調査及び市内の町会長や市の職員を交えて行ったインタビュー調査により得られた。

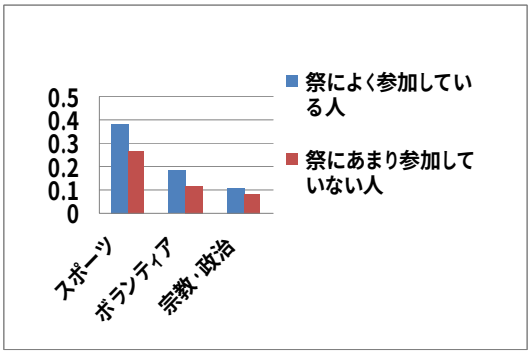

図 1　祭への参加頻度と構造的ソーシャルキャピタル

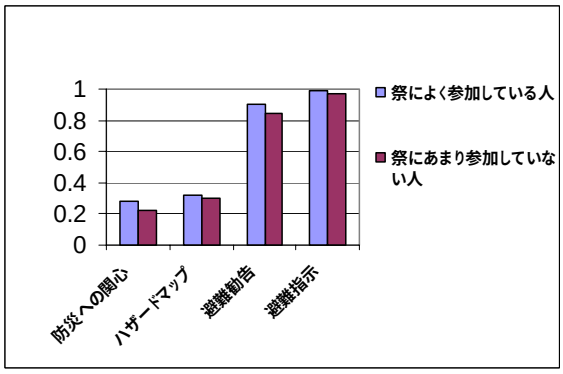

図 2　祭への参加頻度と災害対応意識

３．共分散構造分析

次に、防災意識と SC 及びだんじり祭が互いに及ぼしあっている影響を定量的な観点からも明確にするために共分散構造分析を行った。防災意識の構成要素として、ここでは自助・共助意識と災害対応意識を取り上げる。SC の構成要素として「信頼・互酬性」（認知的 SC）、「結束型ネットワーク」（構造的 SC）、「橋渡

キーワード　ソーシャルキャピタル，だんじり祭，自助・共助，災害対応意識
連絡先　〒611-0011　京都府宇治市五ヶ庄　京都大学防災研究所　TEL　0774‐38‐4038

し型ネットワーク」（構造的 SC）を挙げる。「結束型ネットワーク」は組織内の結びつきであり、内向きで排他的な側面がある。「橋渡し型ネットワーク」は異なる組織間で形成され、異質な人や組織を結びつけるため、より広い互酬性を生み出す。これらは潜在変数であり観測できないため、本研究では世界銀行の枠組みを参考に、「信頼・互酬性」やその他の項目の定義をモデルに適合するように調整した。

作成した相関係数表を表１に示す。表１から災害対応意識と各種ソーシャルキャピタルの間に正の相関関係があることが分かる。また、「祭による獲得」と「信頼・互酬性」の間にある正の相関関係から、祭から得られるものが多いと考えている人は近隣住民との信頼関係を深めていることが考えられる。一方、「祭による損害」と「信頼・互酬性」や「参加頻度」の間に見られる負の相関関係から、祭による損害（時間、費用等）が大きいと感じている人は近隣住民との信頼関係が損なわれていく傾向にあり、だんじり祭への参加頻度も少ないことが分かる。

表１　相関係数表

	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
①	**.280**	**-.193**	-.012	**.173**	**.168**	**.441**	**.240**	1.00
②	**.147**	.048	-.012	-.004	**.210**	**.254**	1.00	
③	.116	.038	.035	.042	**.390**	1.00		
④	.104	-.059	.073	.033	1.00			
⑤	.044	.005	-.085	1.00				
⑥	.051	**-.125**	1.00					
⑦	**-.263**	1.00						
⑧	1.00							

①:信頼･互酬性　②:災害対応意識　③:結束型
④:橋渡し型　⑤:自助･共助　⑥:参加頻度
⑦:祭による損害　⑧:祭による獲得

また、アンケート調査により得られたデータを用いて、最尤法により因果モデルを推定した。モデルの適合指標（GFI）は 0.967 と 0.9 以上の値を示しているため、良好な結果であると判断される。また、「信頼・互酬性」や「自助・共助意識」などの潜在変数から関連する各種の外生変数へのパス係数は全て正であった。そのため、これらの潜在変数はその名が表す意味を持つ変数となっていると判断できる。モデルの概略図を図３に示す。構築されたモデルから、「信頼・互酬性」が「災害対応意識」に大きな影響を与えていることが分かった。そして、「災害対応意識」の強化が僅かに「自助・共助意識」の強化につながることも示された。一方「橋渡し型」や「結束型」は直接防災意識に働きかけず、「橋渡し型」が「結束型」に、そして「結束型」が「信頼・互酬性」に、といった具合に、段階的に影響を与えていることが分かった。つまり、祭を介して得られる SC は防災意識に直接影響を与えるのではなく、認知的 SC に影響を与え、この認知的 SC の強化が災害対応意識をはじめとする防災意識強化に貢献していることが示唆された。

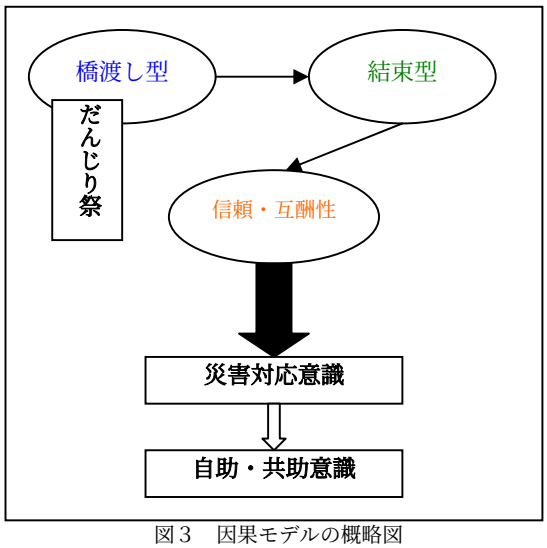

図３　因果モデルの概略図

４．おわりに

本研究では、だんじり祭が間接的に岸和田市の地域防災力向上に寄与していることを示した。このことは、だんじり祭を構造的 SC（橋渡し型ネットワーク）の一種と考えることによって裏付けることもできる。だんじり祭は家族や限定的な交友関係を越えた町単位で行われるため、信頼関係に基づく町内の結束力（認知的 SC）が強化されると考えられる。また本研究において、SC の強化による自助・共助意識の変化が災害対応意識の変化と比較して少なかった。このことは、ここ数年間岸和田市を含む泉南地域を襲った大規模な災害がなく、多くの住民が災害対応を行政に委ねている傾向にあることが一因と考えられる。今後は、だんじり祭で培われた信頼や結束力を、地域の自主防災組織の活動にも生かす方法を検討することが課題である。

参考文献

１）　Knottnerus J.D.: Rituals, Emotions, and Collective Events; Submitted for presentation at the 101st annual meeting of the American Socialogical Association, Montreal, 2006